

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	藤 井 数 馬
主論文題目： イメージ図式を英語教育で有効に活用するための理論的・実証的研究			
(内容の要旨) 言語学研究において認知言語学が大きな潮流の一つとなって以来、認知言語学研究で得られた知見を英語教育に応用する、応用認知言語学が興隆し、コアやイメージ図式を活用したアプローチが広がりを見せている。しかし、このアプローチを実際の教育指導に取り入れて、どのような効果や影響があったかについて探究した実践的、実証的な研究は、その網羅性や汎用性の観点から十分とは言えない現状にある。また、コアやイメージ図式を活用したアプローチを取り入れた実践を見てみると、その有効性を実証的に論じた研究は決して多くないことが分かる。この現状を踏まえ、本研究ではイメージ図式を英語教育で有効的に活用するための実践的で具体的な指導指針を提言することを最大の目的として探究する。 本研究は序章と終章を含め七章構成をとり、田中・佐藤・阿部（2006）が提唱するコア理論を基盤にして、以下の三点を研究課題に据えて研究を進めるものである。 (1) コアやイメージを活用したアプローチの期待される有用性と困難点は何か。 (2) 学習者の英語習熟度によってイメージ図式の効果は異なるのか。 (3) イメージ図式を有効に活用するための指導はどのようなものか。 研究課題(1)については、先行研究を広く概観し、有用性と困難性をそれぞれ七点ずつ論証する。研究課題(2)は一回の実証研究をもとに、研究課題(3)については複数回の実証研究をもとに究明を目指す。本研究では合わせて五回の実証研究が行われるが、いずれも指導者としての筆者の視点を組み込み、イメージ図式の有効的な活用をテーマとして、指導方法を計画し、実証実験を行い、その結果を省察して、次の実践のための指導改善を計画し、次の実践に繋げるというアクション・リサーチの観点が組み込まれている。 序章では、本研究の背景をまとめ、研究課題を設定の意味や、本研究の意義等を論じる。 第1章では、コア理論について意味成分抽出論や複数図式論との違いに言及しながら説明を行う。また、本研究で用いる重要な用語について定義づけをし、本研究遂行のスタンスを明示する。 第2章では、認知言語学の知見を応用した先行研究を広く概観し、コアやイメージ図式を活用したアプローチの期待される有用性と困難性を整理することで、研究課題(1)の究明を行い、本研究の議論の基盤を作る。			

第3章では、先行実証研究結果に基づき、イメージ図式の有効的な活用のために、ボトムアップの言語習得概念を重視した指導を探究することの必要性を論じる。次に予備研究を行い、イメージ図式と用例の提示順序だけでは学習効果に顕著な差が見られなかった結果に基づき、体系的な指導が必要であることを論じる。そして、コアと具体事例との意味的なつながりを強化するための一つの有効的な学習形態としてグループ学習を提案し、トップダウン的にイメージ図式を提示した場合と影響の差を検証した実証研究を提示する。

第4章では、学習者の英語習熟度に焦点を当てる。イメージ図式を活用した指導が与える影響が、学習者の英語習熟度によって異なるかどうかについて実証研究で探究し、研究課題(2)を究明する。

第5章では、研究課題(3)を探究するために、エクササイズを取り入れて行った実証研究の結果を提示する。加えて、学習者が産出するコアの質と学習効果の関係に着目して行った実証研究の結果を提示する。そして、これまでの議論と合わせて、イメージ図式の有効的で実践的な指導指針を提示する。

終章では、本研究の理論的、実践的、教育的貢献をまとめ、イメージ図式を英語教育で有効に活用するための指導指針を体系化して提示する。

キーワード：イメージ図式、コア、コア理論、認知言語学